

執筆：ももえもじ
全70ページ
23,270文字

四十代独身女性が シヨタタにへテロする

自分をレズと思い込んで42年……
いつの日から、友人の息子に恋心を抱いて……



そもそも、長崎睦月には性欲が無かった。

「枯れた」という表現が正しいだろう。

四十二歳、独身で一人暮らし。役所に勤務の公務員。勤続年数は今年で二十年だ。もはや結構な重鎮である。ただ、その立場から得られたものと言えば、重労働を真っ向から拒絶する若者の部下と、そいつ等の尻拭いによるストレスだけだった。

ただでさえ人手不足にも拘わらず、定時になったら無理やり帰ろうとする部下を持った所為で睦月は一日に十四時間近く働かされている。怒りに任せて弾圧すればあつさり辞められる可能性を考慮すると、やはり睦月は情けない部下の分まで働く他が無かった。

なお、公務員に約束された休日は無い。土曜日は当たり前のように働き、必要とあらば日曜日も駆り出される。更に言えば、日曜日は休みであっても役所の命令で、自身が所属する環境保護団体の活動に赴かなければならなかった。

生命が搾取されている。言わずもがな過労であり、精神が擦り切れていた。

だからこそ、睦月は「生き甲斐」に感謝する。生き甲斐が無ければ、とうの昔に死んでいただろう。生き甲斐の為なら、睦月は心から全てを捧げる気持ちになれた。

「むつきさーん!!」

(…:ツ!!)

運命なる日のこと。

その存在を求めるべく、チラチラと如何わしく辺りを窺っていると、向こうから睦月を呼ぶ声が近付いてきた。

それまでの曇天が嘘のように、睦月の顔がパツと花開く。

「翔太君ツツツ!!」

出た声があまりに大きく、改めるように睦月が咳払いする。

「一緒にゴミ拾おう？」

「ええ、私で良ければ一緒にツ!!」

「あはは、睦月さん面白いし優しいから大好き!!」

「…:ツツツ!! んもう、そういうことばっか言って…:」

相変わらずの軽口も冷静に躲す睦月。

だが、言葉とは裏腹に背中の中の向こう側は真っ赤に染まっていた。

冬の海だというのに、その一言で大汗が湧いてしまう。生き甲斐は、相変わらず睦月の心を擦ってくれた。

倉吉翔太。睦月と同じ団体に所属している男子○学生である。

好奇心に溢れた快活な性格。愛くるしい中性的な童顔。幼少の頃から世話を焼く、第二の母親的な睦月に懐いていた。

睦月もまた、翔太には強く依存していた。

睦月より一回り、二回りも小さく、年齢に至ってはX倍の差があるにも拘わらず、その純正の輝きに胸を燃やしている。その存在があるからこそ、精神を擦り切った筈の睦月が未だ健在なのだ。

「翔太君。今日も睦月ちゃんと仲が良いねえ」

「あつ、こんにちは」

「こんにちは」

「はい、どうも。こんにちは」

砂浜のゴミを二人で拾う中で嗚声が掛かる。同じく団体に所属する老婦人だった。邪魔するなよと思いつつも、睦月が即座に笑顔で対応する。

「仕事で忙しいのに、今日もご苦労様ね、睦月ちゃん」

「あ、ありがとうございます」

「睦月ちゃんは、いま何歳だい？」

「……もうすぐ四十三になります」

「独身だったかしら？」

「はい……」

内心で溜息を吐く睦月。

団体には高齢者が多い。中には、話し相手を求めて加入する者もいた。

この老婦人は、まさにその典型例だろう。一言でも声が掛かると先は長くなる。

しかも、睦月相手への話題は二つに一つだった。

「結婚はしないの？」

「……まあ、婚期は逃しちゃいましたね」

「そうよねえ、今後どうするの？」

「ちよ、ちよつと、ちよつと」

「うん？」

と、お節介を通り越した老女に、もう一人の老女が助け舟を出す。

そう思いきや、その女性も土足で踏み込んでくる。よくあるパターンだ。

「睦月ちゃんは結婚しないよ。男の人が、その……だものね？」

「ええ？ なんなんだい？」

「男性恐怖症って聞いたわよ。家庭の問題が原因で……そうだったわよね？」
「はあ……」

パーソナルスペースなんて考えたこともない二人に睦月が辟易する。

しかし、老人が言った通り、睦月は異性を毛嫌いしていた。

昔から、男に恵まれていなかった。

睦月は内向的な性格であり、自分の意見を強く言えないタイプだ。

容姿こそ悪くないものの、その性格が災いして学生時代は男にイジメられていた。

また、婆の言うように父親にも恵まれず、社会人になれば上司・部下から精神を
扱られる始末であり、これだけでも男を嫌う理由としては充分だった。

お陰で周りからは同性愛者だと囁かれ続けている。自身も、圧倒的な男嫌いから、
それを疑う余地は欠片も無かった。

よって、唯一受け入れられる異性の存在が翔太だけとなる。翔太は睦月の友人の
息子でもあり、生まれた時から側で見続けている。友人には決して言葉にしないが、
自身も母親のつもりでいる気持ちだった。

けれど、最近になってその家族愛に齟齬が生まれたらしい。愛は愛でも、翔太を
見つめる睦月の瞳に変化が訪れている。翔太の顔を視ているだけでも顔が熱くなり、
話し掛けられれば心臓が飛び出すくらいだ。

不意に抱き締められた時は、頭がどうにかかなりそうな程だった。

明らかに、睦月は翔太に対してアレである。ただ、幼少から異性を拒絶していた睦月にとって、その感情は初めてのものだったのだ。

「わッ!!」

「あつ、大丈夫!? 翔太君ッ!!」

不意に、お節介焼きの言葉を聞き流す中で、視界の隅に居た翔太が転んだ。どうやら砂浜に足を捉われたらしい。睦月と老婆たちが慌てて駆け寄る。

「うう、ごめんなさい。転びました」

「大丈夫よ。それより怪我は無い？」

「怪我はない、けど……」

「あらあら、随分と汚れちゃったわね」

波打ち際で転んでおり、翔太の全身は見事に海水と濡れた砂で汚れていた。それに対する老婆の一言が、睦月の人生を変えたと言って良いだろう。

「睦月ちゃんの家って、此処から近かったわよね？」

「……!? え、ええ」

「このままじゃ風邪を引いちやうでしょう。早く連れて行ってあげなさい」

「わ、私の家に……そういえば、夏海も今日は仕事みたいだし……」

夏海とは翔太の母親である。同じく毎週日曜日のゴミ拾いに参加していたものの、バイトのシフトが変わったらしく、最近は活動に参加していない。信頼する睦月に翔太を安心して託しているのだ。

全幅の信用を置いている……にも拘わらず、この時点で既に睦月の心には疚しい気持ち芽生えていた。

いままでの人生において、これほどまでに速く脳を回転させたことはなかった。

(私の家。一人暮らしの私の家で翔太君をシャワーに……)

笑顔の裏で煩わしさを感じていた相手に感謝しつつ、翔太を自分の家に連れ込む様子を想像する。あまつさえ、奥底に忍んだ邪心へと陥る自分を妄想する。この間、僅か一秒ほど。一秒で睦月は今後のシナリオを組み立てていた。

いまにも飛び出しそうな鼓動。息が荒くなり、視界が鮮明になっていく。

「なにしてるの？ 早く行かないと」

老婆が急かす。睦月は覚悟を決めたように翔太の手を引いた。

「そうですね。翔太君、良い？」

「うんッ!! ありがとう!!」

「……良いのよ。では、今日はお先に失礼します」

「ええ、会長には私から言っておくから」

「はい……」

公務員という立場にも取り柄はあった。

みんなが無条件に信用してくれる。元々の性格もあるのだろう。睦月は幼少から無害な存在として扱われている。老婦人たちも、一ミリだって睦月の良心を疑っていなかった。

罪悪感はある。だが心の壊れた睦月に、もう良心の呵責は無いのだ。

海で汚れた翔太を連れてアパートへと戻る睦月。自室は四階建てのワンルームで、家賃が二万円にも満たない格安物件であるものの、その築年数と管理人の杜撰から価格に相応しい様相を露わにしている。

いまの給料なら、もっと良い場所に引っ越せるだろうけど、心が疲弊した睦月にそんな余裕は無く、新卒時代から二十年以上も暮らしを共にしていた。

外観から既に友人を招き入れ難く、愛する翔太の手を引いた時に、睦月は初めて引っ越しを考慮するようになった。

しかし、そんな後悔も一瞬で吹き飛んでしまう。無警戒に家に入り、シャワーを浴び始める翔太を、そのシャワーの音を聞いていたら、居ても経っても居られなくなつた。

「……………」

当初は、覗く考えすら無かったのだ。

睦月に背を向ける翔太の身体は年相応に細かった。

まだ肉付きが不完全であり、線が細くて女子のようだ。

後ろ姿だけならば、異性に見紛う程の美しさ。身体だけに非ず、鏡越しに窺える無疵な翔太の美顔も、睦月の知る異性から遠く乖離する。穢れなき無垢な赤裸々に神々しさすら感じてしまい、数度目の、固唾を呑む音が鳴る。睦月の音、翔太の音。

その細い背中に睦月が近付き、そつと手を当てると翔太の全身が跳ねた。

「どうしたの？ そんなに慌てて。私と一緒にイヤだったかしら？」

「そ、そういう訳じゃ、ないけど……」

「前にも何度か入ったじゃない。緊張するなんて大人になったのね」

「……………」

「ほら、チカラを抜いて？」

「う、うん」

二人で入浴が当然という空気を作るものの、睦月も内心では一杯いっぱいだ。

意識しなければ、荒い鼻息が浴室に木霊することだろう。懸命に自分を抑えつつ、ゆつくりと翔太の背中を繊手でなぞっていく。翔太の肌を、静かに、記憶へと植え付けるように、全身から心まで感じるように、優しく撫で上げた。

「んっ、ふうっ、んっ……!!」

少女のような細い声が漏れる。翔太が必死で嬌声を食い止めているのだ。背中に性感帯が通っている者は多い。敏感な肌の翔太も例に漏れないようであり、睦月が背骨に沿って十本の指を行き来させるだけでも感じていた。

翔太の、初めての性的快感だった。

全身の毛穴が開き、ゾクゾクと何度も身震いを繰り返す。

「あっ……んんんっ!! んっ、ふう、ふう、んっ……!!」

「翔太君、気持ち良いの？」

「な、なにしてるの……？」

「なになって、汚れているから擦ってるだけよ？」

「そ、そっか……」

「気持ち良いの？」

「………擦りたいかな？」

「そう。なら大丈夫ね」

「………んっ、ふう、ふう、ふう……んっ!!」

「可愛い声……女の子みたい。翔太君、可愛い。とっっても……」

「可愛いって言われても嬉しくないし」

「そうなの？ 気を悪くさせたなら、謝るけど……」

背中を撫でるだけでも、まるで天に昇るような心地だった。

お互いを感じている。翔太は初めての性的快感に徐々に酔い始めており、睦月もX倍の年齢差という背徳感やら、男女なる垣根へと踏み込む自然的な儀礼に感銘を受けていた。

まず、前提として睦月は処女である。幼少期から異性を毛嫌いしていた睦月には当然だろう。よって、いまこそ男女の触れ合いを初めて体験していた。

「さつきから目を背けてるけど、別に見ても良いのよ？」

「うっ……見れないよ、そんなの」

「そんなのって、酷いわあ」

「ご、ごめん」

「良いのよ。ボディソープを取ってもらえる？」

「う、うん」

生物の本能的に、やはり男女の交わりには不思議な抒情が渦巻くものだ。

ほんの少しの交わりでも、荒廃した砂地へと雨が降るように、もう何年も性欲を忘れていた筈の睦月に光が差す。文字通り、ボロボロに荒れていた肌が潤っていく。翔太との触れ合いだけで若返っていくような気さえした。

翔太は、頑なに異性の肌を見ないようにと目も瞑り出している。

ウブとほほ笑んでいた睦月も、次第に面白く感じなくなったらしく、ステージは次の段階へと進む。翔太から受け取ったボディソープを手のひらに落としていくと、それを両手で擦り、自らの身体へと拡げていった。

翔太とは違って肉付きの良い睦月の身体が泡塗れになる。腕に、肩に、お腹に、それから豊満な胸にも油状を拡げていく。鏡越しに、ちらちらと様子を窺う翔太。性の知識が皆無でも、なにかが始まることを察しているのだろう。身を固くしては、無防備な背中を小刻みに震わせていた。

「な、なに、するの？」

「翔太君の身体を洗うだけよ。私の身体でね……」

「えっ!? それって、どういう……」

「こう、重なり合って……」

「わあああああああああッ!」

そして遂に肌が重なり合う。睦月の胸は反り返った月形であり、乳首が上向いている。カリで擦るように、翔太の背中へと下から押し潰していった。

密着した状態で豊かな乳房が潰れる。女性特有の弾圧が翔太の全身へと伝わる。

翔太は今度こそ明確に性的快感を露わにした。

「あッ、あッ、ああああッ、あッ……!!」

身を丸めながら、顔だけは僅かに上向いて歯を食いしぼる。

初めての性的快感。戸惑う時間が終わり、オスとしての本能が急速に萌芽する。ペニスが初めて自我を持った瞬間だった。

「な、なん、で……なに、これ……」

「寒いから、こうして身体を重ねた方が温かくて良いわよ。痛かったかしら？」

「い、痛くは無いけど……」

「じゃあ、身体を洗っていくわね、んっ、しよっ、んっ、ふうっ」

「うあ、ああっ、あああああああッ、あああああああッ!!」

「はあ、はあ、ふう、んっ、ただ、身体が擦り合ってるだけだから……!!」

背後から翔太を抱き締めると、睦月が膝立ちの状態から何度も上半身を上下させ始める。接着した乳房がボディースーツの粘液に沿い、翔太の背中を彼方此方へとひた走った。

処女の睦月だが、秘めたポテンシャルは同僚たちの話題になるくらいに高い。

むっちりした肉感はボディースーツとの相性が抜群であり、そこに自慢の乳房が躍進すれば、プロの男優さえ鳴かせられる程だ。

相手は、性を知らない少年。萌えたばかりの、あまりに敏感な体質の少年である。睦月の轟くパイズリは、背中を走るだけで翔太に恍惚の扉を開かせた。

「あああああッ、あああああッ、はああああッ!!」

「翔太君ッ、はあ、はあ、お肌スベスベね。若いって最高よッ」

「ま、待って、むつきさんッ、なんか、なにか……へんな、へんなの……!!」

「んっ、はあ、はっ、なにがへんなの？」

「わ、分かんないけど……あああッ、あッ、んんんんッ!!」

何度も全身の痙攣を繰り返す翔太。全身の毛が逆立っているようだ。乳房から、翔太の快感が伝わるように睦月も満悦する。二人して「ゾクゾク」を味わい、身を震わせていた。

ただ、翔太は初めての快感に戸惑いが隠せない。身を丸めて目を瞑りながらも、自らの異変には気付いている。逆立ちした男根が上腹部に当たり、その正体不明な滾りに恐怖さえ覚えた。

翔太が震える手でソレを掴み始める。男の本能がそうさせた。

「……翔太君が握る必要は無いわ。わ、私が……」

「え、ちよっ、あああああッ!!」

睦月も、男性器を触るのは初めてだった。

翔太を抱擁する手が、更に正面へと進む。コツンと当たったソレが、あまりにも熱くて睦月が驚く。驚きながらも、そつと石鹸塗れの手で握りしめた。

「ひいっ、あっ……!!」

「これが、翔太君の……男のツ……!!」

「あッ、あッ、あああッ……!!」

「どうしたの、翔太君？ 痛かった？ すっごく震えてるわよ？」

「ちがっ、その……あの……」

「気持ち良い？」

翔太が無言で頷く。

一握りされただけで気持ち良くて震えるなんて……と、睦月が感動する。

背中に乳房を宛がわれながらの一握り。まるで銃口を頭に押し付けられたように、それだけで翔太はピクリとも動かなくなっていた。

少しでも動けば、確実にになにかが起こると直感している。心の準備が要る。

しかし、睦月の付度は無く、捉える繊手は優しく動き出した。

「あああああああああッ、あああああああッ!!」

「すっごい硬い。話には聞いてたけど、こんなに熱くて硬いなんて……」

「待って。待って待って待って待って待って待ってえッ!!」

「気持ち良いんでしょ？ だったら、我慢する必要は無いわ♥」

「で、でも……このままじゃ……!!」

「大丈夫だから……二人で気持ち良くなりましよ？」

「む、むつきさんも気持ち良いの？」

「ええ、こんな気持ちは初めて。翔太君の匂いを嗅ぎながら、おっぱいを翔太君の背中に擦り付けて……こうやってスリスリしてるだけで、なんだか脳みそがお湯の中に浸かっちゃってるみたいなの」

「あつ、あ、そ、それ、僕もっ……頭の中っ、へ、へんな感じなの……ドロドロになってるみたいで……脳みそ、溶けてみるみたいで……怖い……のッ……!!」

「翔太君も私と同じ気持ちなんだ。嬉しい。実は私も初めてで怖かったの」

「むつきさんも？」

「胸を押し付けてるんだから、ほら感じるでしょ？ 私の心臓もバクバクなの」

「ほ、ホントだ!! すっごいバクバクしてる……」

「私も興奮してるの。それに気持ち良くて、でも怖くて……」

「……分かったッ!!」

「ん？」

「二人で気持ち良くなる!? 二人なら大丈夫だから……むつきさんとなら……!!」

「……ッ!! 流石は男の子ね。私よりも、ずっと年下なのに。初めてのことなのに、それでもリードしてくれるなんて感激しちゃう……!!」

あまりにも「初めて」が多過ぎて慄いていた翔太だが、睦月も同様なのだと知り、一挙に緊張感を和らげる。安心感が室内に籠り、更には睦月の手を取っていた。いまを受け入れる翔太に、睦月も緊張を大幅に緩和させる。

同時に、翔太へと溢れる愛が止まらなかった。

「あああつ、翔太君、大好き……!!」

「……僕も、むつきさんのこと大好きだよ」

「ふあ、あああつ……!!」

翔太もまた、睦月の愛に対して愛で応える。

翔太の言葉に、睦月は初めて脳でパチパチと弾けるようなオーガズムを味わった。ビクビクと背筋が震える。背骨へと電気が通るように首が引き攣る。

翔太にしがみ付いていなければ、そのまま床に倒れる所だった。

「で、でも、きつと私の感じる『大好き』と、翔太君の言ってくる『大好き』は種類が違うと思うわ……」

「おんなじだよ。僕も大好き、なんだもん……」

「う、あ……ッ、あ、あまり、大好きって言わないで……!!」

「えっ、な、なんで!?! ご、ごめん……」

「謝らなくて良いけど。嬉し過ぎるのよ。翔太君に大好きなんて言われちゃうと」

「えー？ だって大好きなんだもん。大好き。むつきさん大好き!!」

「あああああッ、ああああッ、あッ!!」

「あはは、むつきさんビクビクしてる。大好きー。大好き大好き大好きッ!!」

（なんなの、これ。もうっ。本当に現実なの？ 翔太君に……!!）

好きと言われる度に、睦月の身体が激しく揺れる。

それは翔太も分かっており、悪乗りするように何度も「好き」を連呼した。

ただ、翔太も恥ずかしくなってしまう、睦月に背けた顔は真っ赤になっていた。

「……………」

「……………」

二人して意気消沈である。興奮し過ぎて疲弊していた。

睦月が改めるように咳払いする。止まっていた手や身体を再び動かし始めた。

「うあッ、あッ……!!」

「翔太君に大好きなんて言われたら、もっと好きになっちゃうじゃない。そういう言葉は、本当に好きなヒトの為に取っておきなさい？」

「えー、でもホントのことなんだけど……」

「……それは、家族として？ 夏海と……お母さんと同じ感じ？」

「……よく分かんない」

「ふう、その言葉だけで幸せ過ぎて死んじやいそうよ」

「僕も……どうなっちゃうの、これ……」

「ん？ あ、絶頂が近いのね。私も、よく分からないけど、我慢しなくて大丈夫」

「うあっ、ふあ、あああっ……で、でも、このままだと、なんか、ヤバイ……」

「気持ち良いんでしょ？」

「うん……」

「なら、大丈夫。私を信じて？」

「うん……」

翔太の弛緩する雰囲気は伝わる。信頼感が形となったような気がして睦月が再び身体を熱く燃やす。乳首が異様な程に硬く、それでいながら乳房はプリンのように嫋やかだった。

潰れた乳房を背中全体へと行き渡らせる為に、スクワットの動きで身体を張る。セックスは運動だという友人の言葉を思い出す。その通りなのだ実感した。

小さくスクワットしながら、捉えたペニスを扱っている。徐々にその手の動きが加速していく。まるで翔太と一体になったような気分であり、さながら臨界点まで把握した緩急だった。

実際に、翔太のオーガズムは間近だった。震えた声で予見する。

「む、むつきさん……」

「んっ、はあ、はあ、ふうっ、んっ……ん？」

「な、なんか、『出る』かも……」

「……ッ!! 大丈夫だから、そのままッ。私を信じてくれるんでしょ？」

「うんっ、分かったっ、あああ、気持ち良いよ、ああっ、凄い……来るっ、来るッ、なにか……来るっ、あああ、はあ、はあ、はあ、はあ……」

「あああああっ、翔太君ッ、翔太君ッ、はあ、はあ、気持ち良くなっ、二人でイキましよう……はあ、はあ、んっ、はああっ」

「うあああ、熱いっ、全身ッ、溶けるうううっ!!」

二人してクライマックスを悟る。睦月の手は全速力だった。

前屈だった翔太の体勢が徐々に変形する。頑なに隠していた男根を露わとした。

「翔太君、最後に……!!」

「はあ、はあ、えっ？」

「もう一度、好きって言って……」

「す、好きッ、むつきさん、大好き、好き好き、好き……むつきさんっ、好き!!」

「ふあああああっ、あああ、翔太君、大好き……大好き、好き好き好きッ、……好きッ、大好き、好き好き好き好き好き好きいいいいっ!!」

「あああつ、ふあああああああああああッ!!」

初めての扉が開いた。

湯気が出る程に真っ赤な顔を天へと仰ぎ、背中を睦月へと預けてソレを主張する。
生まれて初めて目にする白濁の汁が、正面の鏡へと吹き荒れて行った。

